

何のために勉強するのですか？

13年前、アメリカ合衆国バージニア州からホームステイで我が家に来てきたアリソン（16歳）は、学校には毎日通っていませんでした。不登校でも何でもなく、バージニア州は、登校して学ぶと決められたこと以外は、家庭で学ぶことを選択してもよいというカリキュラムが整備されていました。家庭では母親（ホームティーチャー）が娘の学習のお世話をしていたそうです。

コロナ禍で日本はICT後進国の汚名を晴らすべく「GIGA（ギガ）スクール構想」の推進に拍車をかけました。一人一台端末は、臨時休校等で「子ども達の貴重な学びを止めてはならない」というのが大きな目的でしたが、学校にどうしても馴染めないという子ども達にとっては端末を利用したネット学習が今後選択肢の一つになっていくのではないかと言われています。



【小1と中3の交流学習】

世の中は、あれほど待ち望んだ「アフターコロナ」にいつの間になんかなくなっています。「コロナ前には戻らない」という意見、「対面のよさが再認識された」という意見、コロナ対応もそうでしたが、まさに「正解のない中で、多様な考えの存在を認めつつ、誰もが『そこは理解できる』という納得解を見つけていく時代」になりました。莫大な税金が投入された一人一台端末も、何を目的にどう活用していくべきか、学校はまた一つ、課題を背負うことになりました。

さて、「何のために勉強するのですか？」という問いの答えはどんなものがあるのでしょうか？そして、納得解は何になるのでしょうか？くれぐれも、（勉強をする）主語は子どもだけではないことは共通認識として捉えておくべきかと思えます。

答え例その1

朝がくると まど・みちお

朝がくると とび起きて
ぼくが作ったものでもない 水道で顔をあらうと
ぼくが作ったものでもない 洋服を着て
ぼくが作ったものでもない ごはんをむしゃむしゃたべる
それから ぼくが作ったものでもない 本やノートを
ぼくが作ったものでもない ランドセルにつめて背中にしよって
たったか たったか でかけていく

ああ なんのために
いまに おとなになったら ぼくだって ぼくだって
なにかを 作ることが できるように なるために

答え例その2

ノーベル賞作家大江健三郎氏の話です。
大江さんの長男・光さんは知的障がいがありました。光さんは7歳になると、特殊学級（現在の特別支援学級）に入学しました。光さんは、音に大変敏感な少年でした。

ある日、父健三郎氏は息子の教室を覗きました。そこでは、光さんは両手で耳を塞ぎ、体を固くして過ごしていたそうです。健三郎さんは「光はなぜ学校に行かねばならないのか。障がいは一生涯治らないのだ。野鳥の声を聞き分け鳥の名前を親に教えるのが好きなのだから、自然の中で親子三人、暮らせばいい

いのではないかと考えたそうです。

しばらくして光さんは、自分と同じように騒がしい音を嫌う友達を教室に見つけました。光さんはその子に寄り添うようになり、休み時間には一緒に耳を塞いだそうです。そして、身体能力が自分よりも低いその友達のために、トイレにも付き添ってあげるようになりました。これまで母に頼って生活してきた光さんにとって（自分が友達のために役立っている。）という思いは新鮮な喜びとして感じられたようです。

その後光さんは音楽と出会い、13歳の時から作曲をはじめ作曲家になっていきました。健三郎さんは言います。

「光にとって音楽は、自分が社会とつながっていくための、一番役に立つ『言葉』です。国語も理科も算数も体育も、自分をしっかりと理解し、他の人とつながっていくための『言葉』です。そのことを習うために、いつの世の中でも子供は学校へ行くのです。」

「何のために勉強するのですか？」答えはたくさんあるでしょう。小学部の保護者の方は子供さんがまだ幼いからそんなことは思いもしないかもしれませんが、「俺の子だから、勉強は嫌いなはず！」なんて決め込んで可能性を潰してはいけません。

「勉強」と思っていないだけで、大人も仕事や生活で日々学び続けていることは確かです。「『生きる』』ということは『学ぶ』』ということである」と言った先人もいます。私たち大人の使命は、子ども達に「学ぶことは喜びである」ことを伝えていくことだと思っています。



【西都市青少年健全育成市民大会にて、立派な発表を行った代表生徒】

見方を変えると、意識も変わる

「目先の悩みなんか天文学的に考えたら取るに足らない」「人類の歴史に照らすと今の悩みなんて一瞬にも足らない」要は、細かいことに捕らわれ過ぎてはならない、時に広い視野で物事を見ることも必要であるという先人の教えです。

私たち教員は、生徒指導の極意として、「子ども達を多面的に理解すること」に努めています。「優柔不断」という性格は「受容する心がある」「思慮深い」と見方を変えることができます。また、クラスでは物静かでも、時・場・相手が変われば雄弁に話している子供もいます。

子ども達には、「『私はこうだ、あの子はこうだ』という決めつけをするのは止めましょう。」と指導しています。私自身もそうでしたが、現在人前で話したり、先頭に立って仕切られたりしている方の多くは「小さい頃はとても大人しく、もしもじている子でした。」と聞きます。（幼い頃からずっと一緒だったから、もう全て知り尽くしている）のかも知れませんがこれからの未来、成長はお互い知らないはずで。

ドローンやスマホは私達が見る世界を大きく変え、考え方で変えています。「物事に『絶対』はない」と言います。柔らかく寛容な感性で日々を過ごすと、別のものが見えてきます。

本日終業式にて、私の幼い頃のエピソードを交えつつ「強い人になるためには」という話をしました。どんな人が強い人なのか、どうすれば強くなれるのか、自分をこまかさない、自分から目を背けないことの大切さを伝えました。ご家庭でも話を聞いてみてください。1学期のご協力、誠にありがとうございました。夏休みに少しでも強くなれるといいねと、子ども達を見送りました。大きなけがや事故に遭うことなく、有意義な夏休みを過ごしてほしいと願っています。